

# 幼児のつくる活動の発達についての研究 2

A Research Report about Development of Activities which Infants Make 2

富岡卓博\*・小野由加里\*\*

Takuhiko TOMIOKA・Yukari ONO

キーワード：つくる活動，共同注意，表現個性，オートポイエーシス，5歳児の造形

## I 他者とのかかわりが造形表現に及ぼす影響

### I-1 はじめに

本論文は、研究1に続き、幼児期における「作ること」の活動について支援のあり方を明らかにすることを目的とする。研究1では0歳児から満年齢6歳にいたるまでを年齢順において、手の巧緻性の発達とつくる活動の発達の変容の特徴的な傾向を網羅的に示した。今回はその中から特に次のテーマを2つを焦点的に取り上げた。

1, 他者とのかかわりが造形表現に及ぼす影響

2, 表現個性

まず今日注目されている教育観や方法論をつくる活動に当てはめての考察を試みた。「共同注意」「オートポイエーシス」などである。それに加え、つくる活動の実際の現場で詳細に観察することにより、活動にかかわる様々な立ち居振る舞い、あるいは独り言や会話などの言葉、制作物からの何らかの傾向性を見出し、それを分析的な考察をすることによって一定の発達特性を明確に示そうとした。

テーマ1では、子どもの育ちの環境の中で特に人的環境の要素が及ぼす影響を中心テーマにおいた。それも、子どもと子ども間での影響、子どもと保育者あるいは家族からの影響に分けて考えることができる。

テーマ2では、表現の子ども間の相違について、各年齢児に共通する一般的傾向特性とが重層的に存在することに着目する。この場合、個々にみられる違いではなく、一定集団員数内での性差や男児女児間を超えて見られる相違を表現行為と作品から分析しタイプ分類が可能かどうかをみていくことにある。

本論は、I、IIではテーマにかかわる考察を論じ、IIIにおいて実践の現場から関わる事例報告により構成した。

### I-2 「つくる活動」の現状

#### 飽きやすい子ども

幼児は繰り返しが大好きで、大人から見ると不思議でもある。単純なことを、何度も何度も飽きもしないで繰り返す。こうしたことを大人は成長発達途上でみられる最も子どもらしさとして捉え、この繰り返し行為を認め、かわいささえ感じて目を細めてきた。すなわち、そこに子ども生来の本質を認めるのである。

ところが、そうした一方で「近頃の子どもは飽きっぽい」などといわれるようになった。大人は子どもにできるだけ一つのこと集中することを願う。それが遊びでも何でもよいのであり、そうした力が大きくなってからも落ち着いて一つのこと根気よく取り組んでいく基となると思うからである。

どんな国の子どもも時を越えてつくる活動の場面では無心に時間を忘れ取り組んできたことが思い浮かばれる。今日の子どもを取り囲む環境は、つくる活動の場の条件が社会全体から結果として遠ざけられたり与えられていないため

\* 岐阜大学教育学部美術教育講座  
Department of Art Education

\*\* 美濃加茂市立東中学校  
Minokamo-city Higashi Junior High School

からであり、子どもの本質までが変化したとはいえないのではなからうか。

### きれい好きな子ども

さらに、そうした社会的な要因によると思われる変化傾向のひとつとして、「清潔好きな子ども」が挙げられる。

このテーマの典型的な場面としては、屋外での泥んこ遊びや砂場での遊び、柔らかな石をコンクリートにこすりだす粉づくりなどが思い浮かぶが、子どもの多くが夢中になるがために少々衣服の汚れも気に留めない、清潔好きとは無縁に一心に集中する活動であったはずである。

ものづくり活動はどちらかといえば清潔好きを相容れないところがある。むしろ、子どもの造形活動や造形物は、一見、「小汚い」活動とも言える。しかしそこには子どもの創造そのものが表出していることに気づくことができる。道具の使い方が未熟な技術のため、ギザギザであったり、発想そのものが大人にはない見立てから一見ゴミみみたいな小片がついていたりする場合がある。だが、それらはすべてかけがえない子どもの造形とみることができる。

小さい頃から徹底された清潔な環境で育った結果、紙の接着用のデンプンのりを指で塗ることも抵抗を感じ、ちょっと付いているだけでも気にしてすぐ「手を洗う」という。

今日の家庭の形態すべてが清潔感を追求する風潮に生活がなっているからであろうが、粘土など極端に敬遠する子が急激に増加している。社会全体の必要以上の清潔好きが、子どもの色々な活動を制約し、思う存分楽しむ内容を狭めてしまっているのではなからうか。

### 紙加工文化—遠ざかる木工作材料・用具

幼児の造形活動のための物的環境が家庭においてどのようなものであるかについての統計調査研究報告(福井晴子2002)がある。それによると工作材料の常備状況は、紙類が圧倒的に高い。折り紙(常備率およそ95%)を除いてはそれらのほとんどが生活廃品からであり、新聞紙・ビラ、包装紙・段ボール箱、牛乳パック、紙コップ、紙皿があげられている。

非紙類にはペットボトル、発泡トレ容器、ビニール袋、プリンカップなどで容器類の比率が高い。そのほか糸、ストロー、ビーズなどがあげられているが率は低い。

木切れ、割り箸の木材が25%ほど。布類についても同様の常備率で、今日的生活文化からの思ったよりは高めとはいえ、紙類の足元にも及ばない。

粘土類が意外と高い。小麦粉粘土、油粘土、紙粘土が平均しても30%ほど(さすがに土粘土は10%弱)。

道具については、子ども用ハサミは90%常備され、カッターナイフ15%とある。

この報告からも、今日をつくる活動の材料が紙材、殊に生活廃材に極端に偏していることを示している。

以上、つくる活動が木材加工に重点が置かれていたスロイドをはじめかつてのわが国の活動内容が紙工作への移行が確認される。紙加工、廃物利用全盛期なのか。

紙や布、木片、自然物と、大人からみればどれも身近に思える素材も、今の子どもたちにとっては意外に身近に少なく、使った経験がない。そこで、保育者が子どもに素材との出会いを援助したり、道具の安全な使い方を指導しながら、つくる素材の多様化を常日頃から心がける必要がある。

### つくる活動 本格始動の5歳児

幼稚園や保育所における幼児の造形活動の内容を過去20年間の実践報告から統計的に調査した報告によると、「平面製作(生活画、観察画、想像・お話画)」と「立体製作」に大別した実践内容について、3歳児、4歳児、5歳児の年齢別比較によると、3歳児、4歳児では平面製作が圧倒的な割合であったに対し、5歳児から逆に立体製作が約4割の多くを占めるという結果を得ていて注目される。5歳児ころから体力が急について、何をするにしても力いっぱい活動することができるようになることや、手先の器用さが急に高まることと一致する指摘となっている。

こうした5歳児の姿を示すこととして、次

の写真1-1、写真1-2は満年齢で5歳になったばかりの双子きょうだいの男女児が木工にはじめて挑戦する姿をとらえたもので、女兒は



写真1-1 たもんアトリエ造形教室

満5歳になったばかりの女兒と男児がカナヅチとハンドドリルを使って作業をしている。周りにいる小学2年3年の木工の場に、興味津々と割り込んできて、適当な大きさの木片をさがしてきて手を加えている。製作物そのものより道具を使ってみたいといった態度が強く、邪魔をされた小学生をも圧倒した。見よう見まねの初挑戦だったにもかかわらず、ほぼ正しい使い方、子ども本人も大満足していた。



写真1-2 たもんアトリエ造形教室

女児の釘打ち場面。釘を曲げてしまって困っているのを見て、男児がただちにクギヌキでやり直しを手助けしている。男児にとってクギヌキという初体験の道具を試す好機をえた。この後、女児自らも何回かクギヌキ使用してみることになる。木片は電車。

カナヅチを用いて板に釘を打ちつけている。男児はハンドドリルを器用に使って板に穴あけを試みている。心配するほど危なっかしさが感じられなく写真からも集中した取り組みの様子がわかる。実際に両者とも、釘打ち、穴あけとも成功し、さらに互いに作業内容を交替して続けた。

### I-3 他者とのかかわりが造形表現に及ぼす影響

研究1の項目から、

#### (1) 0・1歳児

生後10か月ごろからは動作をまねることができ始める。お母さんや身近な人の動作を模倣したり、言葉を聞いてものを手渡ししたりすることができる。興味を示したものは繰り返すこともよく、笑顔でやさしく語りかけながら子どもの自発的で無理のない活動を誘うようにする。

つくる活動の準備として、手指の機能分化と興味のあるものに手を差し伸べていくリーチングを表した記述である。

相手の視線を追って相手の見ている対象を見ることを共同注意 Joint Attentionと定義される。乳児期に発生し、対象物に大人(母親など)の視線を感じJoint Visual Attention共同の活動が芽生え、一緒に何かをするという意志がともなうと思われる。これが発展した場面として、保育所で匍匐(はいはい)時期の複数の乳児が同じものに対して寄り集まってきたり、同じような行動をしているのをよく観察することがある。

#### (2) 2歳児

2歳児全体を通して共通する特性を一言でいえば、「何でもまねる」があげられる。まねることで成長する、そのためよい環境づくりが大切となり、子どもにとって、そうした意味でもお手本を見せる母親の役割がもっとも必要かつ重要な時期といえる。

このことも共同注意にかかわる部分があるが、まねることから同じ活動をする、その裏返しとして両者の間に共通理解らしきものが生まれ相互が密接な関係性が発生する。

このように、まねる行為は単に何かができるようになるにとどまらずjoint に含む「連結」とか「絡む」を意味し親密な感情の流れを思わせる。

### (3) 2歳児前期

歩行もこの2歳児前期くらいになると安定し、大きいものを持って歩いたり、またいだり、何かをくぐったり、と、刺激を求めて活発に動きまわる。興味をひく場所にはしゃがみこんで遊ぶ姿が見られる。しかし、母親や保育者などが近くにいる、精神的な支えとして見守っていることが、この時期の子どもにとって安心して活動するための条件となるようである。

### (4) 2歳児前期

2歳児前期では、形の変化に対し、さらに気持ち注がれ、変形できる素材には、親指や人差し指の先に力をこめて扱うようになる。タイミングを見計らって、「すご〜い、すご〜い」と声かけすると、一層楽しそうに活動をする。

この頃になると生来の気質が見えはじめる。明るくほがらかで警戒心の薄い子ども、母親の陰に隠れるようにしていかにも内気な感じのする子ども、気むづかしく顔を合わせようとしないう子どもなどはっきりしてくる。

砂場などの活動では、夢中になって遊んでいるようでありながら近くに見守ってくれる大人の存在があることがどのタイプの気質の子どもにも必要のようである。

特に家庭で養育者（幼児に対する養育者として母親、祖母が主である）が伴っている場合などでは、見守る者が側について子どもの活動に絶え間なく言葉かけしている（特に祖母の場合顕著）ことがある。繰り返されるしつこいほどの支援の言葉はいつの間にか子どものなか

で獲得した新たに言葉となる場合があり、言語発達の役割をしていると思われることがある。

### (5) 3歳児

素材が紙の場合、紙工作に欠かせない道具としてハサミに一層慣れ親しんで使えるようになることが大切である。どんな道具でもよく使えるようになるためには、その道具の仕組みを理解させて、何度も繰り返し正しい使い方をして慣れることである。ハサミについてもいえることである。ただ、子どもが作業しているときは静かに見守り、口出ししないことである。うるさく言われすぎると楽しさが失われてしまう。

### 初めての道具としてのハサミ

「ハサミ使いは2歳児から」という言い方があるが、2歳児後半から始め3歳児で本格的に習熟することをいっている。保育者の中には、安全面を考慮して、4、5歳児をスタート適期を考えるものがあるが、実際に2歳児後半の幼児が幼児用ハサミをぎこちなさがあるもの薄い紙を切ることを十分に楽しそうに行っている。生育初期に与えられた、ある種の経験が後年の発達にかなり不可逆的な影響を及ぼす、という「初期経験の効果」を考え合わせると、格言にあるように決して早すぎるということはない。むしろ5歳児くらまで待って使い始める子どもの様子を観察すると、腕を前方や斜め横から回しこむようにしたり、ハサミの持ち手の指使いが不自然であったりするなど強引に使う姿がみられる。それでもそこそこ切れているので、正しく楽に使う指づかいを指導しようとしても、なかなか治らないとか治そうとしない子が多い。

ハサミの正しく安全な使い方を繰り返し指導することで意識しなくても自然体で使えるようになるのには、3歳児のうちに身に付けることが有効であろう。いわゆる「**臨界期**」の概念が、ハサミ使いにおいて当てはまるとされる。さらに年輪があがって、使用するナイフ類や木工用の種々の道具すべてについて、それぞれ最も習得に適した年齢幅があるはずである。

道具と素材に関わる経験の有無や多寡が造形

能力にどう関係しているのかも今後の研究課題となる。

(6) 4 歳児

4 歳児は、友だち関係を通して育つ。一人だけで何かをつくることも多いが、気の合う友だち同士が集まって、おしゃべりしながら活動する姿がしばしば見られる。友だちと場を共有することにより、会話をかわし、しぐさを交流しながら活動することが、互いに想像力を刺激し合い、つくる活動に、ある種リズムを与え、つくることに活気を生み出すと思われる。

(7) 4 歳児

そして、自分のつくったものを見せ、他人をのぞいて、互いのよい点を見つけてまねて取り入れたりする。まねることへの抵抗はなく、例えば、一人でも優れた発想や創作ができる子がいると、その子のやり方がたちまち広がっていく。

(8) 4 歳児

しかし、まだ、友だちとの協力関係は薄いのも 4 歳児の特徴である。つまり、子どもたちだけの考えで、一つのものを協同してつくりあげたりすることはできない。

(9) 4 歳児

個々の子どもの自己中心の意識が強く、つくったもので遊ぶ場合でも、どちらがよくできたか競争をする。いろいろなつくる活動の場面において、自分と他を比較して張り合い、負けまいとする。素材でいったん自分の気に入ったものがあると、なかなか他の子に譲ったりはできない。おとなが仲裁に入って代わりを示しても簡単には納得しない。つい先ほどまでのたのしい場が一転し、怒ったり泣いたりすることにまで発展することがしばしば起こる。

それも 4 歳児の終わりころには、友だちと仲良くすることの喜びや楽しさが互いに感じられるようになる。

つくる活動での社会性芽生えの4歳児

4歳児から一気に他者（子ども同士、子どもと保育者や養育者など大人）関係の項目が増大する。

保育所や幼稚園など集団の場では、さまざまな場面と形で互いが刺激しあう。

(6) から、つくるのは個々一人であるが、仲間と場を共有し、しぐさを交流することが活動の活性化をはたしていることが指摘される。この年齢の幼児にとって同じような発達レベルの他者の存在がかなり意識され、おおよそ何に興味を向け何をしているのかを気にし合っているように思える。こうした状況では子ども同士間に「共同注意」にあてはまるものが起きやすい。

(7) (9) からもお互いに刺激しあいながら時には見せ合ったり競い合ったりと自己主張をしながら、～し合う場面が多発する。

このように、4歳児は自らがかわられることを求め積極的に物的人的環境に働きかける。つくる活動では初めて知ることが多くなるためか周りがどうしているのかが気になるのであろう。

(10) 5 歳児

つくりたいものの規模が大きくなると、どうしても協力しあう必要が起こる。譲ること、我慢するということを知ることで仲間意識が芽生え、協力して砂場全体を大きな山や川や池、線路や道など、一つのものをみんながかかわってつくる姿が見られる。すなわち、さまざまな場面で、友だちに対しても、大人に対しても、協調的な態度が際だって見られるようになり、そのことはそのまま、つくる活動においてもあてはまる重要な変化となる。

仲間と協同してものをつくりだす場を多く仕組むことで、結果として、社会性や協調性を養い、調和のとれた子どもの育成につながる。つまり、保育者や、友だちとのかかわりの中で学び合う楽しさを育てること。

他の一つは、自分自身を表現することを大切に、独創性を発揮できるような場を保障することで、限らない可能性を秘めている自分に気づかせる。

### つくる活動で協調性が芽生える5歳児

5歳児の特性は、友だち関係の中で生活する、つまり社会性と協調性の芽生えにある。

(9)の後段に示すように、4歳児の終わりころ5歳児になる直前ころにかけて、友だちと仲良くすることの喜びや楽しさが互いに感じられるようになる。さらに(10)の記述にあるように、体力がついてくると何をすることも力いっぱい挑戦的に活動したいという欲求が育ち、それ満たすためにも協力して取り組むと効果的との判断が生まれてくる。その結果として役割分担すると一層合理的なことを知る。そのことは同時に他者を気遣い、自らを制御すること、すなわち、譲り合う、少々の我慢をする、などが不可欠であり、換言すれば、協調性が求められるということになる。

また、できる子できない子、得て不得手の差異が子ども間で認識されている場合、保育者の役割分担の指示によらなくても、自分たちで役割を決めるということもできるようになる。また、できる子ができない子に対し、やってやろうと迫る(教えたがり)ことが頻発する年齢でもある。

5歳児に対する指導で特に注意すべきこととして、協調性が高まる反面、時に保育者に依存しすぎる傾向がみられることにある。保育者の指示による活動になり過ぎないようにすることが大切で、たとえ些細な内容であっても自分自身からでた表現の芽があればそれを認め伸ばす支援が大事である。

## II 表現個性の問題

条件を同じにした造形活動にしても、結果としての作品に違いがでてくる。いまさら指摘するまでもない自明の理といわれるかもしれない。しかし、そうした違いはどこからくるのか、どんな違いがあるのか。表現個性とは何か。このことについての本質に迫る方法としてそうした差異の中に類似点を抽象し、表現間にいくつかの類型を設定することが「表現個性」の本質を理解することになると考える。

写真1-3, 4は5歳児によるクリスマス飾り作りの実践の結果である。ここで注目したい



写真1-3 クリスマスツリーの切り絵

10人ほどの5歳児が4枚おりの紙をハサミで重ね切りしてつくった飾りを、ハンドホチキスを用いてダンボール台紙(保育者作成のツリー形)にとめたもの。ハンドホチキスも特殊な使い方に5歳児の驚きがあった。



写真1-4 5歳児男児(ツリーの部分)

ハンドホチキスで止めることに特に興味を持った男児。10ヵ所も打ち付けてある。

のは、5歳児の発達したハサミ使いの巧みさとともに、造形課題の理解度と造形力の差異の大きさである。写真I-4の作品は他に較べごく小さく単純である。しかし、他に較べ造形力の弱さを道具（ホチキス）使いに必要以上にかかわることカバーし自己主張を果たしている。この例は、描画に表れる個性表現とは質をことにしているが、つくる活動ではこうした出来る出来ないの能力の差異とそれぞれの関心の相違が結果として、造形物に個々の違い、すなわち個性となって表れてくる。

これまででは、保育者の視点が造形本体の出来栄えにばかり置かれてその範囲での評価に集約されてきた。この事例のように大人の物指しにはなかったようなちょっとした個々の子どものかかわり方に視野を広げることで、個々人の特性を認め、そこを切り口にして個性の伸長を図ることが求められる。

3歳児では個々人の子どもがそれぞれにできることを徐々に広げていき、4歳児では同じように基本的に個人制作中心であるが、お互いに刺激しあいながらできる内容の質を高め合う関係がある。すなわち3歳児4歳児までは自らの表現を広げ高めることに力が注がれることになる。自立すること中心の段階といえる。

これ以後の子育ての目標（命題）は、

- ・ 自立する
- ・ 社会と調和する

の二つに要約ができると考える。

この命題間では互いに内容的に二律背反しているということが出来るが、いってみれば人間集団である社会で他者に隷属するのではなく自分を大切にしながら対等な関係の中で生きて行くことになるのであろう。5歳児になると社会（他者）と調和することが加わってくる。このことは先に触れたとおりである。

特に表現行為においては「他者に隷属するのではなく」、「かけがえのない自分」を認識し、必要以上に調和することばかりに気持ちが向かわないように、どんな些細なことでも自分の発想や表現を安易に放棄しないような助言が保育者に求められる。

表現個性については個々人の違いを発見する

まえに、性差による大きな相違に気づく。次のⅢの実践研究においても男児女児間に造形志向の明らかな相違を具体的に指摘している。男女の性による表現の違いはどこから来ることなのか。また、同性間での違いは単なる発達の違いからくることなのか。

つくる活動においては、個々人の目標とする造形（出来上がりへのイメージ）の違いとともに、使いたい道具とスキルが作り手の痕跡を残しそれらが総合されて表現個性となってくる。

従来のつくる活動は最終目標の作品イメージが準備され、子どもに提示され、それにむけて制作をするといった形態が一般的であった。この場合目的がはっきりしているよさがあり、保育者の価値観に沿って準備された用意周到なる造形は学びのシステムが明確である。反面、表現個性は限定されたものとなる。没个性的造形であり目標達成度だけが際立ち、肝心の子どもの主体性の問題が残る。

オートポイエーシスという概念にこの閉塞を打破する可能性があるように思える。オート（自己）ポイエーシス（制作）とは境界を自ら作り出すことにより、その都度自己を制作するという考えである。あらかじめ計画された構想によって制作をすすめていくのではなく、造形環境、造形素材の中に身を置いてそこから出発し、自己の感性を十分に発揮しその状況に発想を得ながら制作する姿をいう。

仮に土粘土素材の場合で説明するならば、何かをつくることを決めてから始めるのではなく、まず土粘土そのものを無心に触る。水を加えどろどろにする、練る、丸める、伸ばす、指先でにぎる、穴を開ける等々の多様な素材への働きかけをしていく中で自らの造形を発想し、偶然に生まれた形から次の形を産出する。次第に確信に満ちた自らの造形へと発展していく。産出する構成要素が存在すれば、満足する造形にいたるまで次の造形を誘導しつづける。このように造形活動を継続しながら、個を創出し自己表現の主体を決定していく姿がみられる。

（富岡卓博）

### Ⅲ 5歳児のつくる活動における「造形表現の方法と内容」に関する考察

#### — 保育園年長児の粘土による「えんぴつたて」づくりから —

#### はじめに

本論文は、保育園年長児の造形活動場面にみられる造形表現を研究対象とし、①5歳児の造形行為を社会的視点から捉え、その形成過程に着目し、幼児の造形表現が他者との相互行為の中でいかにして形成されるかを観察・考察すること②社会的集団の中でなされる造形活動場面に見られる個々の造形作品の多様性に着目し、表現事例と作品を比較・分類することから、その要因と表現の豊かさについて考察することの二点を目的とする研究<sup>1)</sup>の一部である。

本論文では特に、陶芸用粘土を素材とした造形活動にみられた子どもの姿と作品から、

- ・ 表現主体者と他者とのかかわりが、造形要素の生成に及ぼす影響
- ・ 同一造形活動場面において見られる造形表現の多様性(広がり)

の二点について考察する。

#### Ⅱ-1 研究対象の条件と造形活動の概要

##### (1) 研究対象の条件と環境

本研究は、M保育園の年長児(5歳児)クラスを対象として、筆者が行った造形活動の場面に見られた幼児と他者(保育士、友だち、観察者)等との間で取り交わされた相互交渉と造形行為の観察記録、テープによる録音記録、写真、およびそれぞれの造形活動における作品を資料としている。

M保育園では、5歳児(年長)を対象におおよそ週に一回の割合でクラブ活動<sup>2)</sup>を行っている。園児は4月に、書道・コンピュータ・音楽・絵画の4つのクラブから一つを選択し、希望を出したクラブで1年間活動する。絵画クラブも、このクラブ活動の一つであり、おおよそ週に1回のペースで行われ、造形活動をする場である。

対象とした子どもは、この絵画クラブの5歳児32名で、どちらかといえばつくる活動や描く活動が好きな子どもたちである。2002年度絵

画クラブの男児と女児の内訳は(男児20:女児12)の若干男子の多い構成となっている。

##### (2) 研究対象とする造形活動の概要

2002年9月～2002年10月にかけて、陶芸用粘土を使った造形活動をクラブの時間に行った。活動は、粘土遊びを1時間、板状に伸ばした粘土を丸めた筒から発展した「えんぴつたてづくり」を3時間、乾燥、素焼き後の楽釉かけを1時間の合計5時間にわたる。なお作品に釉薬をかけて本焼きし完成とした。

1時間目に、園庭の人工芝の上にビニールシートを敷いて、陶芸用粘土を使って自由に粘土遊びをした。

- ・ 陶芸用粘土を一人800gずつ配布し、その他にも自由に使用できる粘土を5kg用意した。
- ・ 一人一枚の粘土板を使用し、粘土への使用は自由とした。
- ・ はじめに「つくった作品をクラブが終わってからも残しておきたい時は、壊さずにとっておいてください。」「粘土が足りなくなったときは前にある粘土を自由にどれだけ使っても良いです。」と指示をしてから始めた。

2時間目には、粘土を手でたたいて平たく伸ばすことができることを発見した子どもの姿から発展させ、丸い棒とたたら板<sup>3)</sup>を使って粘土を伸ばして板をつくった。伸ばした粘土を、新聞紙を巻いた空き缶に巻きつけ、どべ<sup>4)</sup>を用いて側面の継ぎ目と底を接着した。

- ・ 陶芸用粘土を一人800gずつ配布し、その他にも自由に使用できる粘土を5kg用意した。
- ・ 厚さ9mm、長さ30cmのたたら板と直径2cm、長さ約50cmの丸い棒、プリンカップに入れたどべを一人に一組ずつ用意した。
- ・ 空き缶に新聞紙を巻きつけた。
- ・ たたら板を使って伸ばした長方形の粘土を新聞紙をまいた空き缶にまきつけた。
- ・ 粘土の継ぎ目をドベで接着して、筒状にした。
- ・ 筒状の粘土の底になる部分を別の粘土を丸くのぼしてづくり、ドベで接着した。
- ・ 「えんぴつたて」の高さを考えながら筒を適当な高さに切断した。

この状態までは、全員が同じ条件で進める。



3時間目には、空き缶を芯にして出来上がった筒状の粘土に、自由に手を加え「えんぴつたて」づくりをした。

- ・自由に使える道具として、竹串・ドレッシング容器のキャップ・クッキー型・フィルムケース・ヘアカーラーと各自の粘土へらを用意した。

また、筒状の粘土の上に粘土を接着する量や、筒状の粘土の上にへらなどを使って何か描くことなどは、それぞれの子どもの自由とした。

## II-2 造形表現の広がり

### (1) 子どもの実態

以下に示すのが3時間目にみられた子どもの造形行為である。

- ①粘土へらや竹串を使って、筒状の粘土の上に模様や具象形態に描く (写真II-1)
- ②ペンのキャップやフィルムケースで、型をつける (写真II-2)
- ③ペンのキャップやフィルムケースで、型をくり抜き、貼り付ける (写真II-3)
- ④ペンのキャップやフィルムケースで、穴を開ける (写真II-4)
- ⑤好きな形にした粘土をドベで接着する (写真II-5)
- ⑥模様のつく道具をつかって、テクスチャーをつける (写真II-6)



(写真II-1)  
①粘土へらや竹串を使って、筒状の粘土の上に模様や具象形態に描く



(写真II-2)  
②ペンのキャップやフィルムケースで、型をつける



(写真II-3)  
③ペンのキャップやフィルムケースで、型をくり抜き、貼り付ける



(写真II-4)  
④ペンのキャップやフィルムケースで、穴を開ける



(写真II-5)  
⑤好きな形にした粘土をドベで接着する



(写真II-6)  
⑥模様のつく道具をつかって、テクスチャーをつける

(3) 結果

子どものつくった「えんぴつたて」には、作品の広がりが見られた。写真Ⅱ-7は、3時間目の活動終了後に乾燥・素焼きをし、釉薬をかけて本焼きした全員の作品である。

作品から、筒状の粘土に接着した粘土の量と、表現方法、内容に個人差やひろがりがあることがわかる。(1~29の数字は、図の番号に対応。例を示す)

① 粘土がたくさんつき、描かれた跡がほとんどみられないもの

(例：1(男児)の作品、2(男児)の作品、18(男児)の作品)

② 粘土が少につき、描かれた跡がみられるもの  
(例：8(男児)の作品、15(男児)の作品、23(女児)の作品)

③ 粘土はほとんどついておらず、描かれた跡が多くみられるもの

(例：27(女児)の作品、29(女児)の作品、30(女児)の作品)

今回の粘土を使った造形活動(えんぴつたてづくり)では、土粘土の感触を十分に楽しむことと、粘土の可塑性を活かした立体的な造形に取り組むことをねらいとした。本論文では、3時間目の「えんぴつたてづくり」の活動場面にみられた子どもの姿と活動後の作品を分析対象として取り上げる。

まず、造形活動中に見られた子どもの姿(事例1)から、表現主体者と他者とのかわりか、造形要素の生成に及ぼす影響を考察する。次に、活動後の作品(事例2)から、筒状にした粘土を土台とした「えんぴつたて」に現われた造形要素を幾つかのタイプに分類する。そして、同一造形活動場面において見られた造形表現の多様性について考察する。

Ⅱ-3 事例1(3時間目の活動)

(1) 表現主体者と他者とのかわりか、造形要素の生成に及ぼす影響

粘土を用いた造形活動の3時間目、空き缶を芯にして出来上がった筒状の粘土に、自由に手を加え「えんぴつたて」づくりをした場面での観察記録である。

(1) A(女児)とH(女児)の様子

フィルムケースを使って、粘土を丸い形にたくさんくり抜いていたHは、そのくり抜いた粘土を三つ重ねて、上に小さく丸めた粘土を置いた。

(H：H(女児)の会話、K：K(女児)の会話、A：A(女児)の会話、O：筆者の会話)

保育者が「Hちゃんケーキ？」と尋ねるとHはうれしそうに

H：「いちごのってる(ケーキ)」と答える。

(写真Ⅱ-8)

それを隣で見ていたAは、同じようにフィルムケースでくり抜いた丸い形の粘土の真中にへらで穴をあけ、

A：「ドーナツ！」

と大きく叫び、筆者に粘土を差し出す。

(写真Ⅱ-9)

隣でつくっていたKも同じようにフィルムケースでくり抜いた丸い形の粘土の真中にへらで穴をあける。Aは、自分の粘土板の上にあったひも状にのばし、粘土をくると丸めるたものを手に持ち

：「ドーナツデキタ！」

と差し「あーん」と食べるふりをする。

(写真Ⅱ-10)

その後、Aは、(写真Ⅱ-10)の二つの形態をつくり「ホットドック」と「ケーキ」と命名した。



写真Ⅱ-8

フィルムケースで丸い形をいくつもつくっていたHは、そのくり抜いた粘土を三つ重ねて上に小さく丸めた粘土を置いた。保育者が「Hちゃんケーキ？」と尋ねられるとHはうれしそうに「いちごのってる(ケーキ)」と答える。



写真Ⅱ-9

Hと保育士とのやりとりを隣で見ていたAは、同じようにフィルムケースでくり抜いた丸い形の粘土の真中にへらで穴をあけ、「ドーナツ!」と大きく叫び、筆者に粘土を差し出す。



写真Ⅱ-10

Aの隣でつくっていたKも同じようにフィルムケースでくり抜いた丸い形の粘土の真中にへらで穴をあけて「ドーナツ」をつくった。Aは自分の粘土板の上にあった別の粘土をひも状にのばし、くるりと丸めて手に持つと「ドーナツできた!」Kといっしょに筆者に差し出す。



写真Ⅱ-11

「ドーナツ」をつくった後で、Aがつくった二つの粘土作品。左を「ホットドック」、右を「ケーキ」と命名した。

### 事例1に対する考察

フィルムケースで丸い形をいくつもつくっていたHは、そのくり抜いた粘土を三つ重ねて上に小さな丸めた粘土を置いた。保育者が「Hちゃんケーキ?」と尋ねるとHはうれしそうに「いちごのってる(ケーキ)」と答えている。

Hのフィルムケースでくり抜いて作った丸い形をケーキにみたてたことが、保育士の「Hちゃんのケーキ?」という言葉によって認められ、保育士という他者にも理解された。Hはそのことに喜びを感じ、苺がのせてあるケーキだと説明を加えていると考えられる。

そして、Hと保育士とのやりとりを隣で見ていたAは、Hの「フィルムケースでくり抜いて作った丸い形をケーキにみたてたこと」を真似し、同じようにフィルムケースでくり抜いた丸い形をつくる。そしてその形をいかして、粘土の真中にへらで穴をあけ、「ドーナツ」を作ることを思いつき「ドーナツ!」と大きく叫び、筆者に粘土を差し出す。さらに、Aの隣でつくっていたKも自分の粘土板の上にあったひも状にのばし、粘土をくるりと丸めるたものを手に持ち「ドーナツデキタ!」とKといっしょに差し出している。

この後、Hはさらにたくさんの「ケーキ」と命名された形態をつくり、えんぴつたてに接着している。(写真Ⅱ-12・13) Aも、「ドーナツ」をつくった後に「ケーキ」と「ホットドック」と命名した形態をつくり(写真Ⅱ-10)、えんぴつたてに接着している(写真Ⅱ-13)。

この事例から、表現主体者と他者との関わりが、造形要素の生成に及ぼす影響について三つの視点が挙げられる。

まず、Hと保育者、A・Kと観察者である筆者とが、表現の結果生まれた作品を間にはさんで対話をしていることである。このことで、HとAとKはともに、自分のつくりだした作品が何を表現したものかということが、他者に対話をとおして理解された。つまり、表現主体者と他者との間に、表現したことの共通理解がなされた。そのことで、表現主体者の心が満たされ、次の造形表現意欲へとつながったことが考えられる。この作品をはさんだ対話では、保育者と

観察者である筆者という他者の存在は、表現主体者にとって「作品の鑑賞者」であると同時に、「作品を共通理解し意味や価値を与える者」である。

二つ目に、AとKが「ケーキ」や「ドーナツ」という具体的な食べ物にみたてを二人で他者に見せていることである。AもKもともに女兒であるが、その様子は、ままごと遊びを楽しんでいるようであった。造形活動と普段の遊びの関わりが見られる。このことは、他児という他者の存在を、「共同して遊びを発展させる者」としてとらえている。また、造形表現そのものが遊び性を含むことによって活動が豊かになり、発展していくことも考えられる。

三つ目に、Hが始めた「フィルムケースでくり抜いて作った丸い形をつくる」という行為を、Aがすぐに自分の表現行為として取り入れ、同じようにフィルムケースでくり抜いた丸い形をつくっていること、そしてできた形態を活かして、粘土の真中にへらで穴をあけ、「ドーナツ」を作ることの思いついていることである。AはHを真似し、そのアイデアを取り入れ、さらに「ケーキ」から「ドーナツ」という別のものに発展的に応用しているのである。このことから、AがHという他者の存在から、「どうするとよいかと造形の方法」をつかんでいるといえる。ただし、AがHの作品全体を高く評価しているかどうかはこの事例ではわからなかった。

他児の真似をして造形表現をしている子どもの姿は、この事例の他にも多数見られた。このことについて次に述べる。



写真II-12 Hのえんぴつたて



写真II-13 Hのえんぴつたて

Hのえんぴつたてには、いくつもの「ケーキ」と名づけられた形態が付けられている。写真II-12の「ケーキ」には「いちご」とHによって命名された丸い粒の粘土がのこっている。写真II-13では、「フィルムケース」で作った丸い形もみられる。Hがえんぴつたてに付けた粘土の形態は、すべてくり抜いた丸い形の粘土が基本になっている。



写真II-14 Aのえんぴつたて

写真中央の丸い形態が、写真II-11でつくられた「ケーキ」、ケーキの左横の細長い形態が写真II-11でつくられた「ホットドッグ」である。筒をはさんで反対側には「ドーナツ」と命名した形態が接着されている。

## (2) 他児の真似をすること

他児の真似をして造形表現をすることについて、「えんぴつたてづくり」にみられた例をもとに述べる。

### SとMの様子



写真II-15 S(女児)のえんぴつたて  
ペットボトルの蓋と、ペンのキャップで丸く型をつけたものを三つつなげ、その中に顔を描いている。黒と緑と水色の釉薬で模様を描いている。



写真II-16(女児)のえんぴつたて  
ペットボトルの蓋と、ペンのキャップを丸く型をつけたものを三つつなげ、その中に顔を描いている。黒と緑と水色の釉薬で模様を描いている。

写真II-15と写真II-16は、「えんぴつたてづくり」の活動で制作したS(女児)とM(女児)のえんぴつたてである。ペットボトルの蓋と、ペンのキャップで丸く型をつけたものを三つつなげ、その丸の中に顔を描いき、仕上げに黒と緑と水色の釉薬で縦縞模様を描いている。二人の作品は、形・色ともによく似ている。

似た作品をつくったSとMも、事例1のHと

Aと同様、隣り合ってつくっていた。そして、お互いの姿がよく見えるようにして、真似をしながらつくったり描いたりしたものである。真似をすることは、否定的に捉えられがちである。それは、自分の力で表現できることを大きな目標としている場合である。しかしここで取り上げた子どもの例は、必ずしも「自分の力で表現できない」という理由から友達の本真似をしているのではないようである。というのも、お互いが真似をすることを認め、同じペースで進むように片方の子どもが真似をしている子を待っているからである。また、嫌々ながら真似させてあげているというのではなく、楽しみながら真似しているように感じられた。また、同じような作品が出来上がったことに対して二人ともが満足している。

このことから、これらの事例に見られた真似をする行為は、「友だちと一緒に」「一緒だから友だち」というような、子どもたちの友だちに対する思いの表れだと考えられる。

一方、真似をされたと言ってけんかになることがある。それは、例えば自分が考え出した「すごいこと」「いいこと」を自分だけのものにしておきたいのに、誰かがこっそり真似するときである。保育者に「すごいね」などと誉められたことを、真似されたのを見つけたとき、「あの子、まねした」と言いくる。

「わからない、自信がない」場合の本真似がある。2001年度の絵画クラブには、年度途中で転園してきた子どもがいた。その子と同じクラスの子どもが、クラブの「約束事」のようなこと(例えばおかたつけの後に床についた絵の具をぬれ雑巾で拭くこと)をよく教えていた。普段の保育の中でも、まだ慣れない園の生活の中で、わからないことを教えてくれる友達がいたようである。その場合、教えてくれる子の真似をした造形表現がみられた。特別に教えてもらわなくても、「わからないとき、自信のないとき」は他の子や周りの状況を見て真似をしてやってみることがある。

5歳児にとっていっしょに何かをする「友だち」という他者の存在は、とても大きいものである。子どもたちの造形表現が、友達という存

在に支えられ、友達が存在によって発展し楽しさや意欲につながっているとえるのではないか。そして、5歳児にとっては真似をする事も一つの楽しみとして造形表現を発展させていく要素になりえるといえるのではなかろうか。

### II - 3 事例2

#### 「えんぴつたて」に現われた造形要素のタイプ分類

子どものつくった「えんぴつたて」には、筒状の粘土に接着した粘土の量と、表現方法、内容に個人差や広がりが見られた。

#### ①. 粘土がたくさんつき、描かれた跡がほとんどみられないもの



写真II-17  
T(男児)の作品

好きな形にした粘土をドベで接着している。画面左中央にあるのは「カービー」



写真II-18  
I(男児)の作品

好きな形にした粘土をドベで接着している。完成後「車」と命名した。



写真II-19  
M(男児)の作品

クッキーの型で抜いた粘土をドベで接着している。

写真II-17 T(男児)の作品は、粘土好きな形にしたドベで接着している。「カービー」と命名したものがついている。Tは、粘土遊びの時から粘土をこねること・丸めることを好んでしていた。

写真II-18 I(男児)の作品は、「車」の形を別の粘土で作し、ドベで接着したものである。

写真II-19 M(男児)の作品は、クッキー形でくり抜いた同じ形の粘土が、重ねて接着されている。

三人に共通していることは、粘土をつける行為を造形の中心としている点である。そのため、作品全体が大きく見える。また、持った時の重量感がある。粘土を接着する時に力を加えたためか、筒の形が多少ゆがんでいるが力強い印象を受ける。

#### ②. 粘土が少につき、描かれた跡がみられるもの



写真II-20  
M(男児)の作品

好きな形にした粘土をドベで接着している。また、串を使って線を描き、クッキー形の後をつけている。つけた粘土は「カニの手」



写真Ⅱ-21  
O(男児)の作品

好きな形にした粘土をドベで接着している。また、ドレッシングのキャップでくり抜いた跡をつけ、串で線を何本も描いている。



写真Ⅱ-22  
M(女児)の作品

丸めた粘土をドベで接着している。「ねずみ」。車を使ってその横に「くま」を描いている。

写真Ⅱ-20 M(男児)の作品は、好きな形にした粘土をドベで接着している。また、串を使って線を描き、クッキー型の跡がつけられている。「カニの手」をイメージして粘土をつけていた。

写真Ⅱ-21 O(男児)の作品は、ドレッシングのキャップでくり抜いた跡や、ペンのキャップでつけた跡が連続していくつもつけられている。また、串で線を何本も描いている。さらに、好きな形にした粘土をドベで接着している。

写真Ⅱ-22 M(女児)は、団子状に丸めた三つの粘土をドベで接着し「ねずみ」と命名している。串を使ってその横に「くま」を描いている。

三人に共通していることは、粘土をつける行為と描いたり型で跡をつけたりする行為をバランスよく両方している点である。粘土がそれほどたくさん接着されていないためか筒の形のゆがみも少ない。粘土がつけられているところと、描かれているところの両方がバランスよくあるため、まとまった印象を受ける。

③. 粘土はほとんどついておらず、描かれた跡が多くみられるもの



写真Ⅱ-23  
S(女児)の作品

ペットボトルのキャップを使って円を三つくり抜き、串を使って線を描いている。



写真Ⅱ-24  
S(女児)の作品

クッキー型で跡をつけ、串を使ってハートを描いている。



写真Ⅱ-25

ペットボトルのキャップを使って穴を開け、串を使って線を描いている。

写真Ⅱ-23 S(女児)の作品には、ペットボトルのキャップを使って円が三つ、くり抜かれ串を使って線を描かれている。

写真Ⅱ-24 S(女児)は、クッキー型で跡をつけ、串を使ってハートを描いている。

写真Ⅱ-25 H(女児)の作品には、ペットボトルのキャップを使って穴を開けたところと、串を使って描いた線が見られる。

三人は、描いたり型で跡をつけたりする行為を造形の中心とし、粘土をほとんど接着していない点で共通している。粘土がほとんど接着されていないためか、筒の形のゆがみも少なくすっきりとした印象を受ける。

## 事例2に対する考察

### 「えんぴつたて」に現われた造形表現の多様性の考察

土台となる筒の粘土に、粘土がたくさんつけられ、描かれた跡がほとんどみられないタイプ①は、男児に多く見られた。作品全体が大きく見える。また、持った時の重量感がある。粘土を接着する時に力を加えたためか、筒の形が多少ゆがんでいるが力強い印象を筆者は受けた。

土台となる筒の粘土に粘土が少しつけられ、描かれた跡もみられるタイプ②は、粘土がつけられているところと、描かれているところの両方がバランスよくあるため、まとまった印象を筆者は受けた。

土台となる筒の粘土に粘土がほとんどついておらず、描かれた跡が多いタイプ③からは、すっきりとした印象を筆者は受けた。このように、描画することに力を注いだ作品は、女児に多く見られた。

筆者の受けた印象は、以上のように異なる。しかし、どの造形が豊かであるかと言うことはできない。それは、どのタイプの造形をした子どもも、夢中になって取り組み、自分の作品に対して愛着を持っているからである。

粘土がたくさんつき、描かれた跡がほとんどみられないタイプは、男児に多く見られたこと、粘土はほとんどついておらず、描かれた跡が多いタイプが、女児に多く見られたことは、男児と女児の造形に対する価値観の違いではないかと考える。大きく強そうに見えるものを好む男児の価値観と、かわいらしいものを好む女児の価値観の違いである。

しかし、もう一つ考えられるのは、男児が粘土造形を好み、女児が描画を好むということである。男児は、普通の遊びの中でも砂場で山やトンネルを作るなど泥にまみれて遊ぶことが好きである。女児は、描画の研究の中でハートや星などの記号化された図形によって装飾したり、洋服の模様を細かく書き込むことが報告されている。そうした細かな装飾は、粘土を接着して表現するよりも、描く方が容易である。この違いが、粘土がたくさんつき描かれた跡がほとんどみられないタイプが男児に多く見られること

と、粘土はほとんどついておらず描かれた跡が多いタイプが、女児に多く見られたことにつながったと考えられる。

## まとめ

保育園の年長児を対象とした造形活動を観察することから、5歳児が他者との関わりをとおして造形表現をし、他者の存在が造形要素の生成といった造形内容や、表現主体者の満足感といった心理的な部分に、影響を与えていることが示された。また、同一造形活動場面において、造形表現の多様性(広がり)がみられ、男女の性差によって差異が現われる傾向があると考えられた。

子ども一人ひとりの多様な造形表現を理解した上で、子どもの創造の芽を伸ばし育てていくために、子どもと人のかかわりという人的環境をどのように設定していくか、表現主体者である子どもと、かかわる人とのその社会的関係性に着目したより詳細な研究が課題である。さしあたって、次のような事柄が研究課題としてあげられる。

- ① 社会的関係性とその影響について子ども—子どもの関係では、造形に対する習熟度の違いが、他の子どもに影響を及ぼすのか、一対一の関係だけでなく、基本となる集団の成熟度が造形表現にどう影響するか。
- ② 子ども—保育者の関係では、保育者による子どもの造形への姿勢や言葉かけが造形にどう影響するか。
- ③ 子ども—家庭の関係では、保護者やきょうだい構成が造形にどう影響するか。
- ④ 年齢に応じた人的環境。 (小野由加利)

- 1) 小野由加里 2003 5歳児の造形表現に見られる特性の研究 岐阜大学教育学研究科修士論文
- 2) この保育園では、週に1日クラブ活動の日と定め、自分の好きなクラブで活動する。子どもの個性を伸ばすことを目的として園外から専門の講師を招いている。
- 3) 粘土を均等な厚みに切断するために用いる板。
- 4) 粘土に水を加えて柔らかく溶いたもの。粘土同士を接着する時に用いる。